

Title	隋の煬帝について：その詩に関する一考察
Author(s)	道坂, 昭廣
Citation	中國文學報 (1986), 37: 24-50
Issue Date	1986-10
URL	http://dx.doi.org/10.14989/177424
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

隋の煬帝について

——その詩に關する一考察——

道 坂 昭 廣

京 都 大 學

史上「隋の煬帝」として惡名を残す隋朝二代目の皇帝楊廣は、隋を代表する詩人でもある。

量的には『隋書』經籍志に錄される「隋煬帝集五十五卷」は隋朝の詩人のうちで最多であり、集部に錄されている詩人達のなかでも多い部類に入る。但し、現在我々が見ることのできる確實に彼の作品と判斷できる詩の數は殘句も含めて四十一首である。^②このことは彼の作品の大部が佚してしまったことを示す。しかしそれでも、この數は隋代の詩人のなかでは最多である。

一方内容に關しては、煬帝を含め隋の文學が六朝・唐という文學の盛んな時代に挟まれ、王朝の短命と相俟って、

單に前代を引き繼いだだけという趣旨の評價がなされており、煬帝の詩についても近代人の評價はおおむね南朝風のきらびやかな詩とのみ語られている。^③

しかし現存する彼の詩は多方面の内容を持ったものに分けることができ、確かに南朝風の樂府題の詩もあるけれど、決してそれだけではないようである。

ところで、煬帝は隋に取って換った唐の太宗とその側近には完全に否定し抹殺してしまいたい人物であり、政治的人格的にはほぼその意圖通りとなった。ところが、煬帝の詩が後世に残った經緯には彼らの存在が大きな比重を占めていると考えられるのである。つまり、煬帝に惡王の烙印を押し、政治的に彼を抹殺した人々が、煬帝の文學に關してはそれを保護したのである。その理由は、唐の太宗と側近達が抱いていた文學觀のなかに求められよう。

唐の太宗達が、その文學觀を述べたものとしては、『隋書』文學傳の序をあげることができるが、そこでは煬帝の詩に對して次のように論じている。「煬帝初めて藝文を習ひしとき、輕側を非とする論有り、即位に暨^{およ}び、其の風一變す。

其の『與越公書』『建東都詔』『冬至受朝詩』及び『擬飲馬長城窟』並びに雅體存し、典制に歸す。意は驕淫に在りと雖も、詞に浮蕩無し。^④また、太宗も「朕、隋の煬帝集を觀るに、文辭は奧博、亦た堯舜を是として桀紂を非とするを知る。然るに行事何ぞ其れ反するや。」と臣下に語った。^⑤これらは煬帝の人格と文學を別として把えており、人格と文學の間に存在するある矛盾を論じている。

少なくとも、この二つの論評から唐の太宗達が煬帝の詩を評價する方向にあったことは理解できるのであり、その觀點は、『隋書』文學傳の序にあげられている代表作からみて、近代人の煬帝の文學に對する觀點とは異なっていたのである。

要するに、唐の太宗達にとって煬帝の詩は残すに價する作品群だったのである。ゆえに彼らの論評は煬帝の文學の特色を理解するうえでひとつの重要な鍵になるのではないだろうか。

私は以下において、煬帝の詩のひとつの特色を、この唐の太宗とその側近の評價を基に考えてみようと思う。

隋の煬帝について（道坂）

まず『隋書』文學傳の序で煬帝の代表作とされた二首の詩について考えてみる。

この二首はどちらも煬帝の政治的絶頂期に作られたものである。詩集に『冬至乾陽殿受朝』の題で載録されている前者は東都（洛陽）で作られ、同じく『飲馬長城窟行示從征羣臣』と題された後者は遠征中に作られた。この制作地の違いは自ら詩の内容の違いをもたらしした。即ち、前者は國內の事柄を、後者は對外的な事柄を歌う。しかし兩方ともが、皇帝でなければ歌うことのできない作品であるという點は共通する。

まず、國內において皇帝としての自己の感懷を歌う『冬至乾陽殿受朝』^⑥から見てゆこう。

- | | |
|---------|-------------|
| 1 北陸玄冬盛 | 北陸に玄冬は盛んにして |
| 2 南至晷漏長 | 南至に晷漏は長し |
| 3 端拱朝萬國 | 端拱して萬國朝し |
| 4 守文繼百王 | 守文 百王を繼ぐ |

- | | |
|----------|----------------|
| 5 至德愍日用 | 至德は日用に愍ち |
| 6 治道愧時康 | 治道は時の康きに愧づ |
| 7 新邑建嵩岳 | 新邑を嵩岳に建て |
| 8 雙闕臨洛陽 | 雙闕は洛陽に臨む |
| 9 主景正八表 | 主景は八表を正し |
| 10 道路均四方 | 道路は四方に均し |
| 11 碧空霜華淨 | 碧空 霜華淨く |
| 12 朱庭皎日光 | 朱庭 日光皎し |
| 13 纓珮既濟濟 | 纓珮既に濟濟 |
| 14 鐘鼓何鏗鏜 | 鐘鼓何ぞ鏗鏜たる |
| 15 文戟翊高殿 | 文戟は高殿を翊り |
| 16 采賄分脩廊 | 采賄は脩廊に分かる |
| 17 元首乏明哲 | 元首は明哲に乏しきも |
| 18 股肱貴惟良 | 股肱は惟良を貴ぶ |
| 19 舟楫行有寄 | 舟楫行くに寄る有り |
| 20 庶此王化昌 | 庶はくは此れ王化の昌ならんを |
- 12は冬至であることを語るが、それとともに2は冬の
穩やかな日差しをも述べている。3ゝ6は、その穩やかな

冬至の日のさまからも暗示される國內の平和、それを自分が實現したことを謙虛な表現で語り、7ゝ10は、この國內の平和を示す朝見の行なわれている東都が帝王の居にふさわしい世界の中心に位置していることを語る。ちなみに、ここで述べられているように舊洛陽城のはずれに新たに都を建築したのは『隋書』文學傳序に煬帝の散文の代表作に「建東都詔」があげられていることからわかるように彼自身であり、この部分には自分の計畫した都市を誇る氣持も入っている。ここまでが第一段であり、以下第二段も第一段とはば同じ展開である。即ち1112は、冬晴れの清んだ空間を歌い、13ゝ16は、華やかな朝見の様子を歌う。17ゝ20は、謙虛な表現で以上のような平和と繁榮が、より立派にそして長く續くように願うと歌うのである。

つまり、まず冬の廣く穩やかな空間を歌い(1ゝ2、11ゝ12)次に視點を降して華やかな朝見の場を歌う(3ゝ6、13ゝ16)。そうして皇帝である自分を取り卷く自然と人工の好ましく美しい風景を述べることによって、帝國の繁榮と平和を示し、又そのことによってこの社會の中心である自

分を誇るのである（7—10、17—20）。

この詩のように、國內において皇帝としての感懷を歌う詩は他に『還京師』『獻歲讌宮臣』がある。當然ながらみな皇帝でなければ作ることのできない「皇帝詩」である。

しかし、これら皇帝詩の制作動機の中には皇帝であることの緊張感より、皇帝であることの喜びが潜んでいるのではないだろうか。つまり、世界の秩序をうちたて、平和な世界を作ろうというような創造の決意や緊張から生まれた詩ではなく、現在の平和を樂しみ満足していることから生まれて來た詩なのではないだろうか。

そのように感じられるのは、詩の内容が理想・希望という方向ではなく、現在の繁榮を誇示し、皇帝である自分の身分にふさわしい宮廷秩序という一種の裝飾に重點が置かれていることに原因があると考えられる。

煬帝が、父文帝の質素一方の政策に不滿を持ち、また彼自身が派手好きな皇帝であったことは、『隋書』煬帝紀などからもうかがうことができる。しかし彼にとって、皇帝がそれにふさわしい裝飾を持つということは、當然かつ重

隋の煬帝について（道坂）

要な政策だったのであり、強力な專政を行った彼には、特に無くてはならぬものだったのである。^⑧

だが、それは、先に引いた『冬至乾陽殿受朝』詩の「纓珮既に濟濟、鐘鼓何ぞ鎗鎗たる。文戟は高殿を翊り、采珥は脩廊に分かる」（纓珮既に濟濟、鐘鼓何ぞ鎗鎗、文戟翊高殿、采珥分脩廊）（13—16）や、『還京師』の「東都に禮儀舉り、西京に冠蓋歸る。……嘹亮と鑼笳を奏し、葦蕤たる旌旆を飛ばす。後乗には文雅を趨らせ、前驅には武威を厲ます。」（東都禮儀舉、西京冠蓋歸。……嘹亮鑼笳奏、葦蕤旌旆飛。後乗趨文雅、前驅厲武威。）（1—2・7—10）また、『獻歲讌宮臣』詩の「朝光に劍綵動き、長階に珮聲分る。酒闌はにして鐘磬息ひ、欣びて觀る禮樂の成るを。」（朝光動劍綵、長階分珮聲。酒闌鐘磬息、欣觀禮樂成）（5—8）などの詩句からもうかがうことが出来るように、羣臣をもその一部として表現されている、彼を取り巻く裝飾は、確かに華やかではあるが決して無秩序なものではない。宮殿に、そして煬帝の輦の前後に居並ぶ文官武官らは、むしろ秩序美を構成しているのである。そしてその

秩序美には「禮儀」「禮樂」という古典的な言葉^⑨により、いわば正統的な嚴かな美というニュアンスが含まれている。つまり、煬帝にとって、皇帝としての裝飾とは中國古來の傳統の回復を象徵するものだったのであり、それはまた、帝國の繁榮と平和を暗示するものであったのである。

煬帝は晩年を除けば、往々にして理念だけが先走りしがちであったが、決して内政に不熱心な皇帝ではなかった^⑩。しかし、それらの區々たる政策よりも、それらを爲し得る基礎として中國を古の正しい状態にもどしたということの方に、彼は詩的興趣を感じたのである。

要するにこれらの詩は、煬帝が皇帝であることの喜びから作った詩であり、その喜びとは國が正しい状態にあるという満足感なのである。ゆえに、これらの皇帝詩には、皇帝という自己の社會的位置の認識がその背後にあると考えられる。

次に對外的事柄を歌う『飲馬長城窟行示從征羣臣』を見てみよう。

題名からもわかるようにこの詩は樂府であり、彼以前に

既に多くの詩人によって歌われている。ただ煬帝が歌うような塞外を舞臺とした戦いを歌うのは晉の陸機からである^⑪。さて、この種の塞外を舞臺とする詩は、たとえば、梁時代の王褒の逸話が示すように、多くは塞外の嚴しい自然、異民族との戦いといった苦しみを歌うことを主題としていた^⑫。煬帝の詩もまた、基本的には先行する詩と同様な雰囲気を引き繼ぐものではあるが、詩の重點は他にあるように思われる。

- | | |
|----------|--------------|
| 1 肅肅秋風起 | 肅肅として秋風起り |
| 2 悠悠行萬里 | 悠悠として萬里に行く |
| 3 萬里何所行 | 萬里何の行く所ぞ |
| 4 橫漠築長城 | 漠を横ぎり長城を築く |
| 5 豈台小子智 | 豈に台れ小子の智ならんや |
| 6 先聖之所營 | 先聖の營む所なり |
| 7 樹茲萬世策 | 茲の萬世の策を樹て |
| 8 安此億兆生 | 此の億兆の生を安んぜん |
| 9 詎敢憚焦思 | 詎ぞ敢て焦思を憚り |
| 10 高枕於上京 | 枕を上京に高うせんや |

- 11 北河秉武節 北河に武節を秉り
 12 千里捲戎旌 千里に戎旌を卷く
 13 山川互出沒 山川互ひに出沒し
 14 原野窮超忽 原野超忽を窮む
 15 撻金止行陳 金を撻ちて行陳を止め
 16 鳴鼓興士卒 鼓を鳴らして士卒を興こす
 17 千乘萬騎動 千乘萬騎動き
 18 飲馬長城窟 馬を長城の窟に飲ましむ
 19 秋昏塞外雲 秋は昏し塞外の雲
 20 霧暗關山月 霧は暗し關山の月
 21 緣巖驛馬上 巖に緣ふて驛馬上り
 22 乘空烽火發 空に乗りて烽火發す
 23 借問長城候 借問す 長城の候
 24 單于入朝謁 單于是朝に入りて謁せしやと
 25 濁氣靜天山 濁氣は天山に靜まり
 26 晨光照高闕 晨光は高闕を照らす
 27 釋兵仍振旅 兵を釋き仍りて旅を振へん
 28 要荒事方舉 要荒 事は方に舉る

隋の煬帝について（道坂）

29 飲至告言旋 飲至して言に旋るを告げ
 30 功歸清廟前 功を清廟の前に歸す

煬帝は皇帝在位十二年間に國內各地を巡幸しただけでなく、國外への大規模な遠征を五回行なっている。二度は後でふれる有名な高麗遠征であり、その他三回は、大業三年・五年・十一年の内地地域への遠征である。

この詩がどの遠征のときに作られたかは確定しがたいが、「横漠築長城」（4）や「單于入朝謁」（24）という句、そして「北河」（11）を漢の武帝の遠征を意識して使った言葉と考えると、この詩は、漢の武帝と同じ地域へ同じ目的で遠征した、大業三年四月に長安を出發し、同年九月洛陽に戻るまでの塞外遠征の途次に作られたと考えるのが最も無理がないように思われる。¹⁹

しかし、隋の威望も衰え、遠征途上を突厥の始畢可汗に襲撃され、かろうじて逃れた大業十一年の遠征を除けば、他の遠征はすべて煬帝の政治的絶頂期に行われており、この四回の遠征では場所こそ違いが、煬帝の精神にはすべて同様の高揚があったであろう。

さて、この詩が作られたと思われる大業三年の遠征は煬帝の遠征のなかで最も誇らしく、そして大業五年の遠征とともに、最も効果のあった遠征であった。

つまり、煬帝は彼をもてなす爲に自ら道の草を刈った突厥の啓民可汗と會見し、隋の富裕を示した。また煬帝に同行した妃蕭氏も啓民可汗の妃の天幕を訪問したという。^⑮ゆえに、2122句のような緊迫した状態の遠征ではなく、實際には自らの武威を塞外の異民族に示す旅だったのである。

この詩は大きく分けると三つの部分から成り立っている。第一段は1～12。遠征の目的を歌っている部分である。

4句の長城建設は、この遠征中の大業三年七月のことであるが、あるいは先行する魏の陳琳の詩も意識しているかも知れない。

第二段は11～26。酷しい塞外の中を行軍する遠征軍の様を歌う。この部分は陸機以降のこの樂府の主題と重なり合う。

第三段は27～30。凱旋を歌う。先に述べたように戦いは實際には行なわれず、その予定もなく、そして遠征中に作

られた詩であるから當然まだ凱旋していない。だからこの部分は煬帝の空想の句である。

煬帝の詩は、先行する詩と似てはいるが、その内容を圖式化してみると、前半が遠征の目的、後半がその結果。そして中間に目的達成の爲の苦しみを配するという構成になっている。ゆえに、遠征の結果（功績）は中間に歌われる苦しみに比例して増大することになるのである。そうであるから、この詩の主題は從來の詩のような塞外での苦しみそのものにあるのではなく、苦しみの結果もたらされるもの、即ち後半に歌われている凱旋行事にあるのである。言い換えれば、この詩は外征そのものを歌ったものではなくて、煬帝の抱いていた對外政策、さらに言えばその成功を歌ったものである。

要するに、この詩は豫め確定している成果を持った、いわば一種のイベントとして行なわれた遠征の中で、その成果を廣く時間的空間的に誇った詩なのであり、それゆえに遠征中に凱旋に象徴される皇帝としての對外政策の成功を歌う詩を作ることができたのである。

こう考えてくると、この詩もまた、『冬至乾陽殿受朝』と同じく、皇帝であることの誇りから作られたものであると言ってもよからう。

さて、先に述べたような数回の大遠征を柱とする煬帝の對外政策は、後世彼の政治を批判する場合かならず取りあげられること^⑮から理解出来るように、彼自身はかなりの力を注いだ分野であった。しかし、その理由は指摘されているように、確かに彼の派手好きな性格に依る部分もあるだろうが、『冬至乾陽殿受朝』のところで述べたように、分裂していた中國を本來のあるべき姿に戻した隋帝國の皇帝としての誇りと、それとないまぜになった古典的教養から来る義務感にもあったのではないだろうか。そしてそれがこの詩の後半27～30のように、古典的な言葉を用いさせ、先祖——この先祖は單に楊家の先祖ではなく、むしろ廣く古代の帝王を指していると考えるべきだと、私は思うのだが——に對して、「再びあなた方の時代と同じように異民族を支配下に置くことができました。」と歌わせるのである。

隋の煬帝について（道坂）

つまり、凱旋の華やかな行事自體は、同時代に對する、いわば同一空間での誇りなのであるが、その内面では、歴史を意識しており、自分が失なわれていた中國の榮光を取り戻したのだという、自分もまた歴史の流れの中に身を置き、いわば時間の中で誇っているのである。

そのことがはっきり表現されているのは、『飲馬長城窟行示從征羣臣』と同じく大業三年の遠征中につくられ、この遠征中煬帝がおそらく最も誇らかな瞬間であつたであろう突厥の啓民可汗を呼びつけ會見したときに作つた詩、ゆえに言うまでもなく對外的事柄を歌う『雲中受突厥主朝宴席賦』である。

鹿塞鴻旗駐	鹿塞に鴻旗駐り
龍庭翠輦回	龍庭に翠輦回る
氈帷望風舉	氈帷は風に望んで舉り
穹廬向日開	穹廬は日に向かひて開く
呼韓頓顙至	呼韓は頓顙して至り
屠耆接踵來	屠耆は踵を接して來る
索辮擎羶肉	索辮は羶肉を擎げ

韋鞞獻酒杯 韋鞞は酒杯を獻ず

如何漢天子 如何ぞ漢の天子

空上單于臺 空しく單于臺に上る

この詩の特に最後の二句は、はっきりと自己を歴史の流れのなかで誇っている。

漢の天子とは武帝のことであり、ここで歌われていることはこの遠征中煬帝が常に意識していたであろう、漢の武帝が行なった元封元年十月の塞外遠征のことである。先にもふれたように漢の武帝はこの地域に異民族匈奴を屈伏させる目的を持って遠征した。しかし結果的には失敗に終わっている。最後の「空しく」という一言はその事實を指すとともに、疑問の構造の中にあつて、煬帝の武帝に對する強い優越感を示しているのである。

即ち、この詩は異民族が歸服したことを歌うが、最初二句は遠く異民族の本據を支配し得たと歌い、續く六句は異民族が歸服したさまを具體的に述べる。そして最後に今あげたように「漢の武帝が何の効果もなく、御苦勞にも單于臺に登ったのはどうということだ」と歌いおさめるのである。

つまり、同じ遠征を行いながら、私（煬帝）はすぐに目的を達成して異民族に慕い寄られるようになったが、漢の武帝は苦勞して武威を張りながら何の成果もあげなかったと嘲笑するのである。

言い換えれば、この詩の最後の二句は煬帝の武帝を始めとする過去（歴史時代）の皇帝達に對する優越をはっきりと表現しているのである。

さて、煬帝にはもう二首これらの詩と同じく對外的事柄を歌った詩がある。『紀遼東』一二首である。

この詩は題名から理解されるように、煬帝の、そして隋朝の滅亡の原因となった對高麗戰爭に關つて作られた詩である。

この詩の制作時期に關して、二回に渉る遠征のうち、第一次遠征終了後作られたとする説があるが、私はその意見に納得し難いものを感じる。私はこの詩は第一次遠征中に作られたと考える。^②なぜそう考えるかを説明したい。

其一

遼東海北翦長鯨

遼東海北に長鯨を翦り

風雲萬里清

風雲萬里に清し

方當銷鋒散馬牛

方當に鋒を銷し馬牛を散じ

旋師宴鎬京

師を旋らせ鎬京に宴す

前歌後舞振軍威

前に歌ひ後に舞ひ軍威を振ひ

飲至解戎衣

飲至して戎衣を解く

判不徒行萬里去

判ずるに徒に萬里を行きて去り

空道五原歸

空しく五原に道して歸るにあらず

其二

乘旄仗節定遼東

旄を乗り節を仗て遼東を定め

俘馘變夷風

俘馘 夷風を變ふ

清歌凱捷九都水

清歌し凱捷す九都の水

歸宴雒陽宮

歸りて雒陽の宮に宴せん

策功行賞不淹留

功を策し賞を行ふは淹留せず

全軍藉智謀

全軍に智謀を藉る

詎似南宮複道上

詎んぞ似ん南宮複道の上

先封雍齒侯

先づ雍齒を侯に封ずるに

二首とも、ほぼ全篇にわたって凱旋の様を歌う。つまり『飲馬長城窟行示從征羣臣』と主題が同じなのである。と

隋の煬帝について（道坂）

すると、敗戦後の負け惜しみから作られたと考えるより、他の對外的事柄を歌った詩と同じく、煬帝が抱いている傳統的古典的な皇帝觀によつて、遠征の際に作られたと考えるべきであると私は考えるのである。

つまり煬帝の所謂「皇帝詩」は、皇帝であることの誇りに裏打ちされ、國內では朝廷の秩序が完全であることに、そして國外では世界の中心であることを確認する儀式である凱旋行事に、詩の主題を求めている。ゆえに、この外征詩が、しかも凱旋行事を主題としているながら、皇帝としての彼を成り立たせているとも言ひ得る誇らかな感情からではなく、別の感情から生まれて來たとは考えにくいのである。さらに、高麗に對して煬帝は突厥對策以上の準備をし、戰勝後の方針も明確に示して戰いに臨んだ。そしてその方針は『雲中突厥主朝宴席賦』で歌われたような、異民族（高麗）が中國（隋）を慕つて來るようになせると言うことを基本としていたのである。この事は取りも直さず、この對高麗遠征が理念としては、他の政策と同じく傳統的古典的な皇帝觀に基づいていたという證據になるのである。そう

してこのような煬帝なりの正義があり、それゆえにさらに二回（實質的には一回）も遠征が實施されている以上、目的が實現できなかったときに「成功の儀式を行なおう」と歌ったと考えるより、目的の實現が近づいている時期に「成功の儀式を行なおう」と歌ったと考える方が煬帝の『皇帝詩』の解釋としては抵抗が少ないように思われる。

要するにこの詩は、『飲馬長城窟行示從征羣臣』と同じ理念から作られ、從軍の人々にこの遠征によってもたらされるべき結果を示し、そして煬帝自身の決意をも宣言しているのである。即ち、第一首の最後の二句「思うに、無徒に萬里の道を行き、何の効果もなく五原より歸ったりなどしないのだ。」とは、遠い遼東の地でかならず高麗の人民を歸服させるという目的を成し遂げようという決意の宣言であり、第二首の最後四句も「論功行賞はすばやく行う、全將兵に智謀を借りのだから。どうしてかの漢の高祖が一番憎い雍齒を侯に封じた故事を真似ることがあろうか。」と、遠征参加の將兵を勵まし、自己の戦いにおける態度を表明するのである。

さて、以上に見てきた對外的事柄を歌う四首の詩は、『雲中受突厥主朝宴席賦』も含め皆戦争と關っている。しかし、戦いは詩の主題とはなっていない。詩の主題は國內の事柄を歌う詩と同じく、皇帝として世界をあるべき姿に戻したという誇りであり、それを象徴するものが凱旋行事だったのである。

つまり煬帝にとって、戦いのさまや遠征の苦しみは、以前の詩人のように詩の主題とはならず、それらの結果導かれる功績こそが主題となるのである。そしてそれは世界の中心である中國の皇帝は四域の異民族をも當然歸服させねばならないという、傳統的古典的な考えから生まれて來たものなのである。

ゆえに、これらの對外的事柄を歌う詩もまた、國內の事柄を歌った詩と同じく、自己の皇帝という社會的役割の認識がその背後にあると考えてよからう。

以上、『隋書』文學傳の序に煬帝の代表作として挙げられている二首の詩を中心に考えて來たが、ここで再び『隋書』文學傳の序に戻り、そこに述べられている彼の文學に

對する評價について考えてみよう。

「竝びに雅體存し、典制に歸す。意は驕淫に在りと雖も、詞に浮蕩無し」(竝存雅體、歸於典制。雖意在驕淫、而詞無浮蕩)の部分であるが、この評は内容面への示唆を含むものの、表現面を重視したもののように思われる。

順序は逆であるが、まず下二句から考えてみたい。

「雖意在驕淫^㉔」とは、樂府題の『飲馬長城窟行』の下に「示從征羣臣」とあることからわかるように、煬帝の詩が持っている自己の功績を誇り自慢するという側面を指しているであろう。

たしかに煬帝の詩は皇帝であることの誇りがその根底にあり、魏徵の指摘通りなのであるが、しかしその誇りは先に述べたように、皇帝として自己の持つ政治理念の實現の喜びから生まれたのであり、決して自慢の放肆な發散ではない。ここで言う「驕淫」とは、詩そのものよりもむしろ煬帝の派手な巡幸などの、その豪奢な生活を意識しているのかも知れない。

また「而詞無浮蕩^㉕」とは、前の句が作詩の意圖は自慢す

隋の煬帝について(道坂)

ることだと決めつけたのに對し、實際の詩にはそのような浮ついた言葉がないと救済している。

それは具體的には、たとえば、『冬至乾陽殿受朝』詩の3・6・17・18「端拱して萬國朝し、守文・百王を繼ぐ。至德は日用に慙ぢ、治道は時の康きに愧づ。……元首は明哲に乏しきも、股肱は惟良を貴ぶ。」(端拱朝萬國、守文繼百王。至德慙日用、治道愧時康。……元首乏明哲、股肱貴惟良。)つまり、「自分の功績は古^{いにしへ}の王達のを繼いだだけだが、まだ彼らの治政には及ばない。」とか、「自分は古^{いにしへ}の天子のように優れてはいないが臣下は古の天子の賢臣のように優れている。」といった謙虚な言葉、あるいはまた、『飲馬長城窟行示從征羣臣』の7・10「茲の萬世の策を樹て、此の億兆の生を安んぜん。詎ぞ敢て焦思を憚り、枕を上京に高うせんや。」(樹茲萬世策、安此億兆生。詎敢憚焦思、高枕於上京。)と歌って、皇帝としての義務を怠らないという、政治に對して眞剣に取り組む決意の表明、このような表現を指していると考えられる。

つまりこの句は抑制のきいた表現ということを意味しているのである。

以上のようにこの二句は、煬帝の詩の主題とその表現について述べた部分と考えられる。その主題は皇帝としての自覺から生まれており、それは自己の社會性の認識と言ひ直せる。そしてそれを誇らかに歌うのだが、それは決して自己中心的なものではなく、抑制された落ち着いた表現に依っていると魏徵は評するのである。

「存雅體、歸於典制」の部分、煬帝の詩の持っている霧圍氣について述べていると考えられる。

「雅體」の雅は、まず『詩經』の雅が思い浮かぶ。しかし『文心雕龍』の用例などから考えて、もう少し廣く古典的な美しさを指すと考えてもよからう。

また「典制」^④とは、要するに規範ということである。そして規範とは、既に存在しその價値の確定しているものである。それを文學に置き換えれば典制という言葉も古典的な正しさと解釋し得る。

ゆえにこの二句は、煬帝の文學の持つ古典的霧圍氣につ

いて述べているのだが、具體的には何を指摘しているのだろうか。

今、彼の代表作をはじめとする皇帝詩を古典的ということに注目して見てみると、五經を典據とする言葉がいくつかあるのに氣が付く。たとえば『冬至乾陽殿受朝』だと、17 18 句が『書經』益稷^⑤に基づいているのを始め、北陸(1)・南至(2)・端拱(3)・至德(5)・治道(6)・新邑(7)・四方(10)・濟濟(13)・舟楫(19)・王化(20)^⑥とほとんどの句にある。また『飲馬長城窟行』は先にふれたように、直接には漢の武帝の故事が意識にあると思われるが、五經からの言葉としては、台小子(5)・先聖(6)・萬世(7)・億兆生(8)・振旅(27)・要荒(28)・飲至(29)・清廟(30)^⑦がある。

五經の語は、南朝末期にはあまり典據として用いられなくなっていたように思われるが、それは、これらの言葉が古風であるうえに、政治性を持っていたからではないだろうか。つまり、これらの言葉を用いた詩は、往々にして臣下が、皇帝やその政治、つまり現在の社會を稱贊する場合の作が多い。^⑧そして南朝末期の詩的興味がこの面にはなか

ったことは既に明らかである。

しかしそれに對して煬帝は皇帝という自己の社會的地位の認識を基に、それを誇らかに歌うことに詩的興味があつたのであり、この作詩の動機を表現するには、五經の用語は最適だったのである。

つまり、五經の言葉は煬帝の皇帝詩に節度のある古典的な美しさを與えたと共に、古の天子達いにしへののようでありたいという、彼の皇帝觀をも讀者に示したのである。

煬帝は統一帝國の皇帝として、その繁榮と平和を皇帝詩として歌った。何を繁榮と平和の指標とするかには先に述べたように強い主觀が入っているが、それは決して奇異な考えではなく、例えば煬帝が五經のうちでも多く言葉を選んで『書經』に述べられているような状態だったのである。つまり、儒家的な傳統に基く皇帝觀を煬帝は持っていたのである。そしてこのことに最初に氣付いたのは唐の太宗である。

唐の太宗の「亦知是堯舜而非桀紂」という感想が、煬帝の文學全般に對するというより、魏徵と同じく、その最も

隋の煬帝について（道坂）

特徴的な皇帝詩に對するものであると考えると、魏徵が表現面を重視した論評であつたのに對し、内容面、さらに言えば作者煬帝の内面についての論評を唐の太宗は意圖していたのである。

つまり、「堯舜」は下の「桀紂」と對應しているが、「堯舜」は煬帝の詩から考えた人格を象徵し、「桀紂」は煬帝の行爲から考えた人格を象徵させているのである。「詩から考えると堯舜の如き聖天子であつて、その行爲から想像される桀紂の如き惡王ではない。」という感想は、煬帝が『書經』を始めとする五經を典據とする言葉に託して歌つた政治理念を、太宗が讀み取つたからこそ語れた言葉なのである。

この唐の太宗の感想に象徵されるように、太宗朝においては、煬帝の文學は政治に對する評價とは逆に高く評價されており、その評價は、所謂皇帝詩と呼ぶべき詩を中心になされていたのである。ところが、この皇帝詩は近代において煬帝の詩風とされる南朝末期の綺麗な言葉を連ね社會性を除去された詩とは、その作詩態度に於て大きな距りが

あるということが理解されよう。

さて、もう一度まとめると、唐の太宗達に煬帝の詩の特色として評價された皇帝詩とは、皇帝でなければ作ることのできない詩、つまり自己の社會性の認識から作られた詩であった。しかしそれはまた、皇帝であることの責任感からではなく、皇帝であることの喜びが作詩の發條になっているのである。言い換えれば、皇帝として何かをしようというのではなく、何を實現させたかという完成を喜ぶ詩なのである。そしてこの「何」に入る皇帝としての政治理念は「惡王」のイメージからはほど遠い、古典的傳統的な皇帝觀に基くものだったのである。

しかし、この皇帝詩を煬帝の詩の特色であると判斷する爲には、もう少し考えてみなければならぬ問題が残っている。

二

まず、煬帝以前の皇帝達の詩について考えてみたい。

皇帝の詩としては、有名な漢の高祖の『大風歌』がまず

挙げられる。この詩と、漢の武帝の『西極天馬歌』は、共に皇帝であることを喜ぶ詩であるが、政治理念の實現の喜びから歌われたと言うより、歸郷や汗血馬の獲得といった、自分が皇帝であることを感じさせられた、いわば、偶發的な狀況の中で歌われた詩である。ゆえに、皇帝という社會的地位を自覺させられたものや感情を歌うことに主題があり、煬帝の皇帝詩と似てはいるが歌の重點を置く場が異なっている。

詩の成長期である魏以降は、皇帝にして詩人という人物が増えて来る。曹操を含め魏の皇帝は皆、詩人としても名高い。魏の皇帝達は戰亂の時代の中で、他の詩人達と同じく人間の持つ社會性を自覺させられ、そして、皇帝としての立場から現實と格闘したのである。

つまり、彼らは皇帝という社會的地位の自覺を基に、その政治的理想の實現の爲に現實と對決し、その緊張感が詩になっているのである。たとえば魏の文帝の『黎陽作三首』^⑤の第一首は次のように歌う。

朝發鄴城 朝に鄴城を發し

夕宿韓陵 夕に韓陵に宿る

霖雨載塗 霖雨塗に載り

與人困窮 與人困窮す

載馳載驅 載ち馳せ載ち驅け

沐雨櫛風 雨に沐し風に櫛くしげつる

舍我高殿 我が高殿を捨て

何爲泥中 何爲れぞ泥中にす

在昔周武 在昔 周武

爰暨公旦 爰に公旦に暨び

載主南征 主を載せ南征し

救民塗炭 民の塗炭を救ふ

彼此一時 彼此一時

唯天所讚 唯天の讚する所

我獨何人 我獨り何人ぞ

能不靖亂 能く亂を靖めざらんや

このように「雨の中で苦しい行軍を續けるのは、周の武王のように自分も皇帝として、民の苦しみを救う爲なのだ。かならず自分もこの亂を靖めてみせる」と歌っている。

隋の煬帝について（道坂）

この詩は戦争に關わる詩であり、そういう意味では、煬帝の『飲馬長城窟行』を始めとする外征詩と共通した雰圍氣を持つが、煬帝の外征詩が戦争の結果を主題としているのに對し、この詩は戦争の目的を主題としているのである。この違いを明確にするのは、どちらの詩にも歌われている行軍の苦しみである。煬帝の詩では、苦しみの結果得られた功績を語り、苦しみが功績を修飾するのに對し、この詩では、このように苦しくとも民衆を救う爲には耐えなければと自己を勵ますのであり、苦しみは遠征の目的を修飾する構造になっているのである。

この詩から理解されるように、この時代の皇帝達の詩は、戰亂の時代であつた爲に、煬帝のように政治的理想の實現を喜ぶことからではなく、障害を乗り越えて理想の實現を目指す心の高揚が詩を作らせているのである。

ただし、この時期の皇帝達の詩には、煬帝と同じく皇帝という自己の立場を自覺したうえで作られた詩が幾首もあり、その點では煬帝の皇帝詩と共通する雰圍氣を持っている。そのことは魏の文帝の『黎陽作三首』の第一首からも

窺うことが出来る。

次いで文學至上の六朝時代であるが、特に中期以降皇帝であるまゝに文人であるという人物が輩出する。

私は、ここでは梁の簡文帝を代表として取り上げたいと思う。

梁の簡文帝は皇帝と呼ぶにはあまりに悲惨な状況にあった人物であり、また在位期間も短く、その文學活動も、晉安王時代・皇太子時代が中心である。

しかし、あえて彼を取り上げるのは、彼が六朝末期の詩風を決定した人物であり、その文學上の影響力の強さに注目するがゆゑである。つまり、彼が中心になって作られた宮體詩は、初唐まで受け継がれ、近代の評論に於ては煬帝の文學の源にあるとされているからである。

確かに煬帝が生きた時代は、簡文帝の文學が盛行していた時代である。しかし、それが即煬帝の文學とはならないのではないだろうか。唐の太宗達は煬帝を評價しているのに對し、簡文帝の文學は全面的に否定しているのである。

『隋書』文學傳の序は、簡文帝の文學上の影響力の強さに

ついては認めながらもその文學を批判して次のように述べている。「梁の大同自り後、雅道淪缺し、漸く典則に乖き、争ひて新巧に馳す。簡文・湘東、其の淫放を啓き、徐陵・庾信、路を分かちて鑣を揚ぐ。其意淺くして繁、其の文匿にして彩、詞は輕險を尙び、情は哀思多し。格するに延陵の聽を以てすれば、蓋し亦た亡國の音なるか。周氏梁・荆を吞併し、此風關右に扇^{さん}なり、狂簡斐然として俗を成し、流宕して反るを忘れ、取裁する所無し。」と、南朝だけでなく北朝にまで、簡文帝の文學は擴がって行つたと語るが、それはかの季札の言つた「亡國の音」と呼ぶべき詩であると批判するのである。

この『隋書』文學傳の序の簡文帝等に對する評論は、煬帝の文學に對する評論と對應する所がある。

つまり、

○煬帝

○存雅體、歸於典制。

○詞無浮蕩。

○簡文帝

○（梁自大同之後）

雅道淪缺、漸乖典則。

○詞尙輕險。

○當時綴文之士、
遂得依而取正。

○狂簡斐然成俗、流宕忘反、
無所取裁。

梁の武帝の治世の末期頃から、しだいに古典的正しさを文學が失い始めたが、煬帝の文學にはそれがあり、言葉は軽く亂れた言葉が好まれたが、煬帝の文學では落ち着いた言葉が用いられている。そして第三點の、時代に與えた影響に對する兩者への論評に唐の太宗達の評價の違いが明らかに述べられている。

これを見ると、唐の太宗達は梁の簡文帝達の文學の缺陷が煬帝の文學では取り戻されていると考えていたと解釋できる。

しかし實際、唐の太宗達のこの二人に對する評價の距りは、簡文帝の文學の「情多哀思」と評される部分に原因が潜んでいるのではないだろうか。即ち、簡文帝が詩を作るうえで心魅かれた題材が「哀思」だったのである。

感情は本來、個人のレベルのものであるが特に「哀思」つまり悲しみの情は人間に強く孤獨を感じさせるものである。ゆえに、「哀思」が多いということは、個人の感情を

隋の煬帝について（道坂）

歌う、言い換えれば、社會性を消去した人間のものの思いを主題とするという意味なのである。

それはたとえば、王褒達と共に歌ったと考えられる空想の征戰詩である『隴西行』などでも、軍隊の様を歌いながらも、最後に「長安路遠くして書還らず、寧んぞ知らん征人の獨り佇立するを」と歌い、望郷の思いを述べる。つまり、戦いより、軍隊を構成する個々の人間の心情を歌うことの方に力點が置かれていることから理解されよう。

まとめれば、簡文帝は煬帝のように、人間の社會にある姿ではなく、個としての人間に詩的感興を抱いたのである。つまり詩的興味の方向が、少なくとも二人の特色とされる詩では異なっているのだから、煬帝の詩は簡文帝を中心とする宮體詩の完全な影響下にあるのではなく、異なった要素を持つと言うことが出来る。

さて、このように見て来ると、煬帝の皇帝詩には彼以前の皇帝の詩にみられない要素があることがわかる。そしてそれは、作詩の態度と、その態度によって歌われた題材によって生まれて來たのである。

作詩の態度とは、自己が社會的存在であるという前提のもとに歌う態度であり、その態度から社會を題材として歌うのである。つまり魏の皇帝達のように、對決的ではなく、主體的に社會に参加するのである。

この態度は、煬帝が皇帝であつたということもあるが、それより皇帝として、政治を美とする意識があつたことが重要である。なぜなら、梁の簡文帝を始め、南朝の皇帝達は、政治という、人間に自己の社會性を感得させるものを美とせず、逆に社會性を人間に感じさせない、自然や個としての人間の心情に美を感じていたからである。

煬帝が政治を詩の題材として正面から取り上げていることは既に述べたが、さらに三首の「賜詩」からもわかる。

ここでは、文帝の時代から大業六年の死に至るまで、二代の皇帝に信任された實務官僚牛弘に與えた詩を見てみよう。

晉家山吏部

晉家の山吏部

魏代盧尙書

魏代の盧尙書

莫言先哲異

言ふ莫かれ先哲と異なると

奇才竝佐予 奇才竝びに予を佐く

學行敦時俗 學行は時俗を敦し

道素乃沖虛 道素は乃ち沖虛

納言雲閣上 納言 雲閣の上

禮儀皇運初 禮儀 皇運の初め

彝倫欣有敘 彝倫叙する有るを欣び

垂拱事端居 垂拱 端居を事とす

四句目の「佐予」、そして『書經』を典據としている9・10句で示されるように、牛弘は自分(煬帝)が政治を行う上で有能で役立つ人物であると、政治能力が賞賛の對象となつていたのであり、うがった見方をすれば、臣下の政治能力を譽めることによって、自己の政治を誇っているとも考えられるのである。

以上のように、煬帝の皇帝詩と過去の皇帝の詩との間には斷絶が感じられるのであるが、煬帝の詩のなかでこの皇帝詩はどういう位置を占めているのだろうか。

皇帝詩以外の詩は最初に述べたように多方面にわたる内容を持っている。しかしおおむね、南朝風の社會性を持た

ない詩が多い。そういう意味では皇帝詩とそれ以外の詩の間には區別があると言える。

しかし、これら多様な内容を持つ詩に共通する雰囲気は穩やかさである。たとえば煬帝の紋景詩の代表作と考えられる『春江花月夜』の第一首は、

暮江平不動 暮江平かにして動かず

春花滿正開 春花滿ちて正に開かんとす

流波將月去 流波月を將りて去り

潮水帶星來 潮水星を帶びて來る

と穩やかな自然を歌う。そこには解説を要しない素直な紋景だけがある。

さらに、簡文帝らの宮體詩の如く、女性の美を歌っても、簡文帝のような微細な描寫や女性の内面の描寫もなく、むしろ形式的な女性美の描寫だけである。つまり濃厚な描寫ではなく、これもまた素直な描寫がなされている。たとえば『喜春遊歌』の第二首は、

步緩知無力 歩みは緩かにして力無きを知り
臉曼動餘嬌 臉は曼しくして餘嬌動く

隋の煬帝について（道坂）

錦袖淮南舞 錦袖は淮南の舞ひ

寶袂楚宮腰 寶袂は楚宮の腰

と、感情移入して歌うことなく、先の自然を歌った詩と同じように穩やかな心情で歌っている。

煬帝が南朝の文化にあこがれたことは有名であるが、これら南朝風の詩から考えると、それは南朝文化の盲目的模倣ではなく、何か節度あるものを感じる。この事は煬帝という人物とその文學の本質に關わる問題であり、さらに考えてみなければならないが、今言えることは、皇帝詩も南朝風の詩もある種の抑制がきいており、放肆な描寫や感情の發露を止めていると言うことである。そしてこの抑制の來源が、煬帝の皇帝詩の位置を明確にするのである。つまり『隋書』文學傳の序が簡文帝らの文學を「淫放」と評し「情多哀思」と評したが、煬帝にそのような詩を作ることをつためらわせ、穩やかな紋景詩や節度ある女性美の描寫をさせたものが、皇帝詩をも作らせたとは私は考えるのである。それは煬帝の出自に關係があると私は思う。ここで文學的には南朝に壓倒された隋の出自である北朝の文學につい

て眺めてみたい。

『隋書』文學傳の序には南北朝文學を比較した部分があるが、そこでは北朝文學の特色についてこう述べている。

「河朔は詞義貞剛、氣質なるを重んず。氣質なれば則ち理其の詞に勝る。(一句略)理深きは時用に便なり。」⁴⁰つまり北朝文學は質實であり、現實に密着し現實の役に立つものだったのである。確かに「時用」的な散文の方で、文學史のうえでも同時代に於ても評價される作品が多く、逆に詩の數は寥々たるものである。

これは南朝との自然や社會構造の違いにも一因があると考えられるが、大きくは安定を缺いた政治狀態にその原因は歸せられるべきである。つまり社會の安定度の低さが逆に人々が社會から離脱することを許さなかったたであり、北朝の詩の發展を規制しているのである。

北周の庾信・王褒に代表される、南朝から來た詩人を除くとさらに寥々たるものになる北朝詩は、その傾向を二つに大別することが可能である。

一つは、南朝詩の模倣である。これは北齊時代を中心と

しているが、時代が下り南北交流の活發化とともに、當然ながら作品量も増えて行く。

二つめが北朝詩の獨自性とも言うべき、社會と關わりあつた詩である。これはまたいくつかに分類できる。

まず、南朝の遊戲的な詩に對して、儀式的な詩とでも呼ぶべきもので、應詔詩などがこれにあたる。南朝の應詔詩が宴席などで遊戲的な雰囲気の中で作られることが多かったのに對し、北朝では從軍・行幸などの公式の場で作られることが多く、その行事のすばらしさを壽ぐ内容の詩である。

もう一つは、社會に於ける自己の不遇感から作られた詩で、友人に贈つた詩もこの中に含み得るものが多い。

この種の詩は要するに、人事即ち社會から詩的感興を得た詩であり、北魏が發展的解消を遂げた後の、北齊・北周の争い、そして北周から隋へという混沌とした狀態の中で、この種の詩もまた増えて行く。

北朝人が、このように社會と自己という視點を持ち得たのは先に述べた理由の他に、彼らが詩人である前に實際の

政治運営に關わる官僚であつたことにもよると考えられる。つまり、北朝詩人にとって政治はかなり身近かなものだったのであり、そういう意識を煬帝が引き繼いでいると考えすることは、別に奇異な考えではあるまい。

南北朝から隋にかけての時代、文學は常に南朝が主導であつた。北朝人は、もちろん煬帝も、その價值觀に従つて詩を學んだ。しかし彼らは自己の持つ社會性の認識だけは消すことが出きず、個の中にひたりきることをためらい、また、この認識から生まれる感慨だけは、南朝の文學觀の中におさまらないものだったのである。

煬帝が皇帝であるがゆえと言う限界性は持つものの、社會に於ける人間の主體性の自覺を持った詩を作った源には、南朝人の存在よりも、北朝人の影があるのではないだろうか。

私は小論に於て、從來看過されていた煬帝の詩について考えてみた。考える契機になつたのは、近代人と唐の太宗達の煬帝の文學に對する評價の違いであつた。

隋の煬帝について（道坂）

政治的には徹底的に煬帝を否定した太宗達は、煬帝の詩を評價しており、その評價は煬帝の皇帝詩を中心としたものであつた。

煬帝の皇帝詩は國內で、また國外で作られ、自ずと兩者の内容は異なるのであるが、共通していることは、煬帝が皇帝であることを誇る姿勢であり、古典的な言葉で表現された誇りは、自己を古の聖天子に擬する意識がうかがわれるのである。

そして、煬帝の詩風は南朝の軽い綺麗な詩が盛行している當時にあつては、頗る奇異なものだったのである。つまり煬帝の詩風は南朝の詩風とは對立するものであり、むしろ北朝の詩に近いものと言えるのである。

註

① 『資治通鑑』卷180「隋紀四」煬皇帝上之上、「諡法：好内遠禮曰煬；去禮遠衆曰煬；逆天虐民曰煬」

② 明馮惟訥『古詩紀』は五十首を載せる。丁福保『全漢三國晉南北朝詩』は五十一首を載せる。しかしこれらの詩のうち數首は丁福保も「附錄」として、晚年江都で作つたとし、出

典も『迷樓記』などに求められる。これら晩年の江都での作は、眞に煬帝の詩であつたとしても他と區別されるべきである。なぜなら、この時にはもう彼は社會的には死者であり、彼の人生に於ても區別されるべき時代であるからである。そこでそれらの詩を除外すると、遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』の四十二首になる。ただしこのうち「楊叛兒曲」は遼氏も註記するように、陳の後主と煬帝の孫の侗と混同されており、確實な詩は四十一首である。なおテキストはこの遼欽立『先秦漢魏南北朝詩』を中心に用いた。

- ③ たとえば、前野直彬篇『中國文學史』（東京大學出版會）、鄭振鐸著『插图本中國文學史』（人民文學出版社）

- ④ 『隋書』卷76・列傳四十一「煬帝初習藝文，有非輕側之論，暨乎即位，一變其風。其與越公書，建東都詔，冬至受朝詩及擬飲馬長城窟，並存雅體，歸於典制。雖意在驕淫，而詞無浮蕩，故當時緩文之士，遂得依而取正焉。」

- ⑤ 『資治通鑑』卷291「唐紀八」貞觀二年、「上謂侍臣曰，朕觀煬帝集，文辭奧博，亦知是堯・舜而非桀・紂，然行事何其反也。」

- ⑥ 『冬至乾陽殿受朝』は詩の内容から考えても東都で作られたことは明らかである。この詩は大業六年没の牛弘に奉和詩があり、大業元年から六年までで、冬至を東都で迎えているのは大業二・五年である。

- ⑦ 『隋書』卷24食貨志十九、「隋文帝既平江表，天下大同，

躬先儉約，以事府帑。」

- ⑧ 『隋書』卷3煬帝紀三、「（大業）二年三月庚午，車駕發江都。先是，太府少卿何稠，大府丞雲定興盛修儀仗，於是課州縣送羽毛。百姓求捕之，網羅被水陸，禽獸有堪斃耗之用者，殆無遺類。至是而成。」

- ⑨ 「禮儀」は『周禮』春官・肆師に「凡國之大事，治其禮儀，以佐宗伯。」とある。また『詩經』小雅・谷風之什「楚茨」に「禮儀既備，鐘鼓既戒」とある。

「禮樂」は『禮記』樂記に「樂者天地之和也。禮者天地之序也。和，故百物皆化，序，故羣物皆別」とある。

- ⑩ 『隋書』卷25刑法志二十、「煬帝即位，以高祖禁網深刻，又敕修律令，除十惡之條。……（大業）三年，新律成。凡五百條，爲十八篇，詔施行之，謂之大業律。……是時百姓久厭嚴刻，喜於刑寬。」

- ⑪ 『樂府詩集』卷38に、「樂府解題」曰，古詩，傷良人遊蕩不歸，或云蔡邕之辭。若魏陳琳辭云，飲馬長城窟，水寒傷馬骨。則言秦人苦長城之役也。」とあり、基本的には相別れている夫婦の情愛をそれぞれの側から歌うといった内容の詩であった。しかし、征戰を歌うのは、魏の文帝の呉に遠征することをおう詩が残句ではあるが存在し、それが最も早い。

- ⑫ 『周書』卷41王褒傳に、「褒曾作燕歌行，妙盡關塞寒苦之狀，（梁）元帝及諸文士竝和之，而競爲淒切之詞。」とある。

この逸話の詩は『飲馬長城窟行』ではなく『燕歌行』である

が、塞外を舞臺とする點で共通し、南朝詩人の抱いていた塞外のイメージを象徵する逸話である。

⑬ たとえば清の王士禎の『古詩箋』は「煬帝八年、帝自將征遼西」と第一次高麗遠征の作とするが、本文以下に述べるように私は同意できない。なお、入谷仙介教授の『古詩選』（朝日新聞社）は大業三年の遠征での作としておられる。

⑭ 『漢書』卷6武帝紀六、「元封元年冬十月、詔曰、南越・東甌咸伏其辜、西蠻北夷頗未輯睦、朕將巡邊垂、擇兵振旅、躬秉武節、置十二部將軍、親帥師焉。行自雲陽、北歷上郡、西河、五原、出長城、北登單于臺、至朔方、臨北河。勒兵十八萬騎、旌旗徑千餘里、威震匈奴。遣使者告單于曰、南越王頭已縣於漠北闕矣。單于能戰、天子自將待邊、不能、亟來臣服。何但亡匿幕北寒苦之地焉。匈奴驛焉。」

北河は『中國歷史地圖集』第二冊（秦・西漢・東漢時期）（地圖出版社）によると、現在の內蒙古自治區を流れる黃河の支流である。北河を含め、この記述に登場する地名を見てゆくと、煬帝の大業三年の遠征地域とはぼかさなりあう。さらに高麗遠征時の作との説であるが、高麗王を「單于」と煬帝は呼んだことはないようである。

⑮ 『隋書』卷51長孫覽傳十六、「（長孫）晟以牙中草薺、欲令染干（啓民可汗）親自除之、示諸部落、以明威重、乃指帳前草曰、此根大香、染干遽嗅之曰、殊不香也。晟曰、天子行幸所在、諸侯躬親灑掃、祇除御路、以表至敬之心。今牙中無穢、

隋の煬帝について（道坂）

謂是留香草耳。染干乃悟曰、奴罪過。奴之骨肉、皆天子賜也、得效筋力、豈敢有辭。特以邊人不知法耳、賴將軍恩澤而教導之。將軍之惠、奴之幸也。遂拔所佩刀、親自芟草、其貴人及諸部爭放效之。」

⑯ 『隋書』卷3煬帝紀上三、「（大業三年）八月、……啓民師廬清道、以候乘輿。帝幸其帳。啓民奉觴上壽、宴賜極厚。……皇后亦幸義城公主帳。」

⑰ 陸機の作も最後四句は「將遵甘陳迹、收功單于旃。振旅勞歸士、受爵桑街傳」と凱旋を歌うが、それは現在の苦しみを柔らげる爲に歌うのであり、主題は遠征の苦しみを歌うことにある。

⑱ たとえば『隋書』卷82南蠻傳四十七の論に「煬帝纂業、威加八荒。甘心遠夷、志求珍異、……威振殊俗、過於秦漢遠矣。雖有荒外之功、無救域中之敗。」と述べている。

⑲ 註⑭⑮⑯参照。

⑳ 註⑭参照。この『漢書』武帝紀の記述に對應する部分を同書卷94匈奴傳六十四上に求めると、單于是武帝の言葉聞き「語卒、單于大怒、立斬主客者、而留郭吉（使者）不歸、遷斥之北海上。」と述べており、武帝の遠征がその目的を達成できなかったことを示している。

㉑ 『隋代史』A・F・ライト著・布目潮風・中川努譯（法律文化社）二四五頁。『聖德太子』東アジアの嵐の中で『梅原猛著（小學館）三一三頁〜三一五頁。』

②② 第一回遼征中に作られたと、私が考える理由を以下に述べる。

(1) まず、第二次遼征中に勃發した楊玄感の亂に連座して殺された王胄に奉和詩があり、第一次遼征中あるいは後であることに間違いない。

(2) 王胄の奉和詩は次のようなものである。

遼東涓水事襲行，俯拾信神兵。欲知振旋歸樂，爲聽凱歌聲。十乘元戎纔渡遼，扶藏已冰消。詎似百萬臨江水，按轡空迴鑾。天威電邁舉朝鮮，信次旣言旋。還笑魏家司馬懿，迢迢用一年。鳴鑾詔發渾渾，合爵及曠庸。何必豐沛多相識，比屋降堯封。

この二首は敗戦後に作ったと考えるには少し大膽な表現が多すぎるようである。たとえば第一首「遼東」は陸軍、「涓水」は水軍の戦場であるが、「事襲行」と彼らに言えば、特に大敗し戦果の無かった水軍に對する皮肉になる。さらに第二首は速戦速決と歌うが、それは當初の計畫であり、半年かけて司馬懿の功績に及ばなかったのが結果であった。つまり敗戦後の作とは考えにくい内容を持っているのである。

(3) 『隋書』煬帝紀はこの時期の日付けに誤りがあるのだが、他の記述と突き合わせて煬帝の位置を考えてみよう。大業八年三月遼水の戦線に居り、激戦後渡河し隋軍は遼東城を包圍した。ここから戦いは停滞するが、この時期煬帝は軍中ではなく、側近と共に遼水の中國側の臨海頓に居り、六月になって再び遼東城へ行き、戦いの停滞を責めている。つまり、

遼水↓遼東城↓臨海頓↓遼東城と煬帝は身を置いており、臨海頓は、特に遼水で一度勝利していることと、停滞した戰場から遠い爲に行楽の氣味さえある。つまり臨海頓の時期は、戦いは順調であると煬帝は考えていたのであり、四月臨海頓で王胄と共に側近文人の一人である虞緯に作らせた『大鳥銘』では、凱旋のことが述べられている。ゆえに王胄の詩も、この臨海頓の時期に作られたと考えると、第一首の「十乘元戎纔渡遼，扶藏已冰消」を始め勝利の表現は、緒戦の遼水から遼東城包圍の頃のことを意識していると考えることが可能になり無理がなくなるのである。

つまり、高麗の防衛ラインである遼水を短時間で抜き、主城を圍んでその落城を風光明媚な海邊で待っている。すべてが順序な時期に『紀遼東』は作られたのである。

②③ この種の文章では當然かも知れないが、『親征高麗詔』に「若高元泥首轅門，自歸司寇，即宜解縛焚櫓，弘之以恩。其餘臣人歸朝奉順，咸加慰撫，各安生業。隨才任用，無隔夷夏。」とある。

②④ 註⑭及び②⑤を参照。五原はここでは漢の武帝が遠征して匈奴を服屬させようとしたことを象徵する。この句は彼への強い優越感と、同じ失敗はしないという決意を示す。

②⑤ 『史記』留侯世家二十五、「在雒陽南宮，從復道望見諸將往往相與坐沙中語。上曰，此何語。留侯曰，陛下不知乎。此謀反耳。上曰，天下屬安定，何故反乎。留侯曰，陛下起布衣，

以此屬取天下。今陛下爲天子，而所封，皆蕭・曹故人所親愛。而所誅者，皆生平所仇怨。今軍吏計功，以天下不足偏封。此屬畏陛下不能盡封，恐又見疑平生過失及誅，故即相聚謀反耳。上乃憂曰，爲之奈何。留侯曰，上平生所憎，羣臣所共知，誰最甚者。上曰，雍齒與我故，數嘗窘辱我。我欲殺之，爲其功多，故不忍。留侯曰，今急先封雍齒，以示羣臣。羣臣見雍齒封，則人人自堅矣。於是上乃置酒，封雍齒爲什方侯。而急趣丞相・御史，定功行封。羣臣罷酒，皆喜曰，雍齒尚爲侯，我屬無患矣。」

②6 『書經』畢命に「茲殷庶子，……驕淫矜倖，將由惡終，雖收放心，閑之惟難」とあり、「殷衆士，驕恣過制」と註している。基本的には、限度を越えたわがままさと言う意味であろう。

②7 「浮」は軽いという意味に、「蕩」は放蕩と考えると根無し草のようにふわふわとしているというような意味ではないだろうか。鄧仕傑『釋「放蕩」——兼論六朝文風』（中國文學報35）に「……則「蕩」字還是任縱、放逸、無所拘守之意。」（四十頁下）とある。

②8 『詩經』「毛詩序」に「雅者正也。」とある。

②9 『文心雕龍』體性篇、「故童子雕琢，必先雅製。」を、與膳宏教授は「正統的な作品」と譯する。『陶淵明・文心雕龍』筑摩書房）

③0 『史記』禮書一、「其貌誠大矣。擅作典制，偏陋之說」

隋の煬帝について（道坂）

③1 『書經』益稷、「帝庸作歌曰，勅天之命，惟時惟幾。乃歌曰，股肱喜哉，元首起哉，百工熙哉。……乃廢載歌曰，元首明哉，股肱良哉，庶事康哉。」

③2 ○『春秋左氏傳』昭公四年、「古者日在北陸而藏冰。」疏，日在北陸，爲夏之十二月也。

○『春秋左氏傳』僖公五年、「春正月辛亥朔，日南至。」註，周正月，今十一月，冬至之日，日南極。

○『書經』畢命、「予小子垂拱仰成。」同じく武成、「垂拱而天下治」

○『周禮』地官・師氏、「一曰，至德，以爲道本」

○『禮記』樂記、「審樂以知政，而治道備。」

○『書經』召誥、「達觀于新邑營」

○『詩經』大雅・民勞、「惠此中國，以綏四方」

○『書經』大禹謨、「濟濟有衆」

○『詩經』大雅・文王、「濟濟多士，文王以寧」

○『書經』說命上、「若濟巨川，用汝舟楫」

○『詩經』毛序、「周南召南，正始之道，王化之基」

○『書經』湯誓、「非台小子敢行稱亂」

○『禮記』文王世子、「先聖先師」

○『書經』太甲中、「實萬世無疆之休」

○『春秋左氏傳』昭公二十年、「豈能勝億兆人之詛」

○『書經』大禹謨、「班師振旅」

○『書經』益稷、「惟荒度土功，弼成五服。」傳、五服，侯

・甸・綏・要・荒服也。

○『春秋左氏傳』隱公五年、「三年而治兵，入而振旅，歸而飲至，以數軍實。」

○『詩經』周頌・清廟、「於穆清廟，肅雝顯相。」

以下に他の皇帝詩で五經を典據としているものをあげておく。

○『紀遼東』第一首、「前歌後舞振軍威」

・『詩經』小雅・車牽、「雖無德與女，式歌且舞。」

同じく第二首、「俘馘變夷風」「策功行賞不淹留」

・『春秋左氏傳』僖公二十二年、「楚子使師縉示之俘馘。」

・『春秋左氏傳』桓公二年、「凡公行，告于宗廟，反行，飲至，舍爵策勳焉，禮也。」

・『禮記』月令、「立夏之日，天子親帥三公九卿大夫，以迎夏於南郊，還返行賞，封諸侯。」

○『獻歲讌宮臣』、「六侍宴吳城」

・『春秋左氏傳』隱公五年、「於是初獻六羽，始用六佾也」

○『賜史祥』、「伯夷朝繼重」「功已書王府」

・『書經』罔命序、「穆王命伯罔，爲周太僕正，作罔命。」

・『書經』五子之歌、「關石和鈞，王府則有」

○『賜諸葛穎』、「傳芳導後昆」

・『書經』仲虺之誥、「王懲昭大德，建中于民，以義制事，以禮制心，垂裕後昆。」

○『賜牛弘』、「舜倫欣有敘」

・『書經』洪範、「我不知舜倫攸敘」

³⁴ たといえば漢・韋玄成『自効』，魏・曹植『責躬』あるいは梁・沈約『侍宴樂遊苑餞呂僧珍應詔』などが例となろう。

³⁵ 『魏文帝詩注』による。

³⁶ 梁自大同之後，雅道淪缺，漸乖典則，爭馳新巧。簡文・湘東，啓其淫放，徐陵・庾信，分路揚鱗。其意淺而繁，其文匿而彩，詞尚輕險，情多哀思，格以延陵之聽，蓋亦亡國之音乎。周氏吞併梁・荆，此風扇於關右，狂簡斐然成俗，流宕忘返，無所取裁。

³⁷ 詩全體をあげておく。

邊秋胡馬肥，雲中驚寇入。勇氣特無侶，輕兵救邊急。沙平不見虜，嶂嶮還相及。出塞豈成歌，經川未遑汲。烏孫塗更阻，康居路猶澁。月暈抱龍城，星流照馬邑。長安路通書不還，寧知征人獨佇立。

³⁸ 註³²³³參照。

³⁹ 清代の詩歌集には煬帝の詩が隋を代表して載録されていることが多いが、その中で王士禎『古詩箋』は『飲馬長城窟行』『白馬篇』と共にこの詩を選んでいる。

⁴⁰ 河朔詞義貞剛，重乎氣質。氣質則理勝其詞，……理深者便於時用。